

家 探 し

高木正三（ドリーム編集長）

1月の平均気温が3度である東京から平均気温26度のタイ国へ汗と涙の連続で1月26日第1歩を踏み入れた。騒音とむし暑さ、そして初めて訪れる者に感じる独特のニオイのバンコクで、JICAタイ事務所への赴任挨拶や身分証明書作り、日本国大使館への在留届け、そして技術協力の相手方であるタイ国林産公社への表敬訪問等で5日間過ごした。ネクタイで背広姿の自分が暑さを乗り越えてコッケイに思える。

5日間バンコクで過ごし、1月31日いよいよ最終到着地チェンマイ行き。2カ月ほど前先発隊として赴任し、プロジェクトと一緒に働く井戸川専門官がバンコクまで迎えに来てくれた。やっと落ち着き顔色も良くなる。バンコクからチェンマイまで700km、飛行機で約1時間。この国内線の方が国際線より落ち着く。この時はさすがに外人(?)と思われたのか、スチュワーデスが英語で話しかけてきた。しかしこれが最初であり最後でもあった。その後20回程この国内線を利用したが必ずタイ語で話しかけられた。

チェンマイ空港でプロジェクトリーダー、自分の相棒となるカウンターパートの出迎えを受ける。英語で自己紹介しても自分自身で固くなっているのが分る。真っすぐホテルへ。ホテルのクーラーを入れるとホッとする。ロビーで顔合わせをして明日からの予定打合せ。本来は出来上がっていなければならないプロジェクト事務所も建設中だし、JICAからの供与機材も未だ到着せず、現在は全てが準備中。今は私の生活基盤の整備が第一……と言うことは明日から家探しである。

帯に短したすきに長し

翌日から女房・子供をホテルに閉じ込め家探しが始まった。まだ個人の車もプロジェクトの車もないためタイ国林産公社北部営林局のいつ止まってもおかしくないオンボロ車を借り、冷や汗と熱い汗をかきかき家探し…。先発隊が用意していた候補地区の検討、ホテルのボーイに話の持ち掛け、日本人会への相談。生まれた時から、また社会に出てからも公務員宿舎など自分で選択したことのない者にとって、この家だと決めるのは難しい。

発展途上国は概して強盗や泥棒が多いと聞いていたので安全面に絶対の信頼のおけるところ。言葉の問題があるので日本人の住む家が近いこと、電話も水道設備も十分に停電や断水の無いところ、職場（プロジェクト事務所）や子供の学校との距離や方角、全てを満たすのは難しい。安全面が十分にありこれは大丈夫と思うと、水の施設が悪かったり近く

に日本人が居なかったりする。なかなか決めることができず女房にも相談。2週間近くもホテル住まいであるためかすでにギブアップ。「もうどこでもいいわヨ。早く決めてからホテルから出ましようヨ」。父親の苦勞も知らないで子供たちもそうヨそうヨと相槌を打つ。どうせ後でトラブルがあれば文句を言うのは決まっているのに…。

10軒ほど見た後、この家だと決めたのは家主が検事の家である。家を見に行った時20歳位のメイドが水を出してくれた。暑い国タイではお客さんが来ると必ず水を出す。それもコップから今にもこぼれそうな量の水である。ハウスイーターは家を借りてもらいたい一心で、この家の便利の良い点を色々と説明する。そしてこの水は特別の水だと言って飲み水を渡してくれた。水道の水は当然飲めないの水は市販されているが、てっきり市販されている水だろうと思い、初めてのタイ語「コップンカップ（ありがとうございます）」を使い飲んだ。色々話していると、今飲んだ水は「雨水」だという。エッと驚いた後の祭り…。この国では特別のお客さんが来ると「天から授かった特別の水」、すなわち雨水を出すのである。家を借りてくれるかもしれない我々はまさしく特別の客であり、そのために特別の水を出してくれたのである。

家を借りた後は、使用人であるメイドも雇う必要があるので、この雨水を出してくれたメイドを指さし、冗談半分に「この娘も残してくれませんか？」と尋ねると、さも物でも置いていくような感じで「アーいいですよ」と答えてきた。家を借りること、メイドを雇うこと、2つがいっぺんに解決した。「色々な条件で家を借りる人がいるが、雨水とメイドが原因で家を借りる決心をしたのは君が初めてだ！」と後になってみんなに冷やかされた。

相当の検討したつもりでも後になると見落としはあるものだ。第1にこの家にはシャワー設備はあるがバスタブが無かった。一般的にタイ人は湯船に入る習慣がないためバスタブが無くても必要性は感じない。赴任当初は1日に2～3回シャワーを浴びて済ませていたが、やはり日本人である。たとえ熱くなくても湯船に首までどっぷり浸かりたいものである。第2にこの虫も殺さないようなメイドにも盗癖があり、我が家はもちろん女房の友達も被害に遭った。最初の頃は何も言わずグッと我慢したが、結局3ヶ月程で解雇した。

1年が過ぎ、日本への一時帰国が終わった頃、他の家に移ることにした。この頃になるとチェンマイ事情もある程度わかって来たしタイ語もある程度できるようになり、ハウスイーターとの駆け引きも結構うまくなった。2軒目の家はゴルフ場と目と鼻の先であった。ゴルフ場が近いことを知り、もう家の中身など女房任せでもろ手を挙げて賛成したことは言うまでもない。